

令和元年度 北陸技術士懇談会

総会・特別講演会報告

令和元年度北陸技術士懇談会の総会・特別講演会を令和元年6月8日（土）金沢勤労者プラザ3F会議室で開催しました。

■ 総会

開会の挨拶で橋本会長から、当懇談会の活動内容の紹介の他、本会が50周年を迎え11月に記念行事を開催することで提案しているので承認とご意見をいただきたいとのお願いがありました。

総会の議事進行は会則により会長が議長となり議事を進めました。

1. 議事

第1号議案 平成30年度活動報告と決算(案)

第2号議案 令和元年度活動計画と予算(案)

第3号議案 役員改選について

2. 報告事項

3. その他

以上の内容について審議を行い、いずれも原案通り承認されました。

なお、役員改選では今年度は50周年記念行事もあり、事務局長を埒理事が引き継ぐ以外は再任することで承認されました。

報告事項では、50周年記念行事のロゴマーク制定等に会場から複数の提案や意見もあり、次回の役員会で詳細を検討することで理解を得ました。

また女性部会の平澤委員長から活動報告と課題について報告がありました。



【総会での橋本会長挨拶】

■ 特別講演会

総会終了後、同会場において約80名の参加を得て、特別講演会を開催しました。

講演1：「金沢の都市づくり 来し方 行く末」

～新幹線とスポンジ化の狭間で～

講師 竹村 裕樹氏

金沢学院大学 経営情報学部 教授

・KG都市研究所長

石川県庁において金沢の都市計画に長年携わられており、過去の経緯から現状の課題を具体的に説明され、今後の対策についても具体的な提案をされるなど興味深い講演でした。



【竹村 裕樹氏の講演】

全国的な都市を取り巻く課題は、人口減少社会への変化、量的拡大から質的充実へ、新市街地開発から既成市街地再構築へ、など潮流が大きく変化しているのが現状との認識で、金沢をテーマに都市計画上の変遷や今後の課題、解決策の提案などを紹介されました。

(1) 金沢の都市づくり

歴史的な視点から、誕生期～萌芽期～成長期～成熟期と位置付けた分析を紹介され、これからは新幹線が開業し成熟期に入ったとして、ハード・ソフト両面からの新しいアプローチが必要とされました。

(2) 新幹線開業の光と影

新幹線開業による光として、観光客向けの宿泊・商業施設や文化施設等は経済効果が大きく、加賀・能登全域に効果が波及していること、ライフスタイルの質的向上（便利でスピーディな東京往復等）、広域観光ルート of 展開により近県観光資源とのネットワークによる相乗効果等がある。一方、影としては、観光客のマナー問題や地元客・地元店への支障、観光客向けの流行は本来の文化なのか等が言われているとのことでした。

今後の課題としては、新たな観光の展開や来訪者との共存共栄、移住・定住の促進、市民生活ファ

一ストの取り組みなどが重要と提案されました。

(3) 成長・成熟の光と影

成長期には、郊外へのドーナツ化現象が問題となりましたが、今は「まちなかのスポンジ化」の進展が問題となっています。特にまちなかの人口減少、高齢化、身近な商店の減少がまちなかのスポンジ化を進め、小学校の統廃合やコミュニティ活動の危機、空き地・空き家の増大が起こっていることを紹介されました。その対策として、①まちなか空き地の公共的空間への暫定利用、②空き家・空きビル・統廃合施設の公共的施設への転用、③人間優先のみち空間に再編、④ハード、ソフトのツーウェイ作戦の4提案を説明されました。

講演2：「ダム・水門における流量推定技術に関する問題とその対策」

講師：鈴木 洋之氏

石川工業高等専門学校環境都市工学科 准教授
ダムや水門における流量推定技術は、既に確立していて簡単であると思われる人が多く、現実の現象と理論値の誤差の大きさが存在するなど、多くの課題が残されていることを認識されていないことが大きな問題と指摘された内容は大変興味深い講演でした。



【鈴木 洋之氏の講演】

(1) ダムにおける流入量と放流量の推定問題

ダムの流入量は「貯留量の時間変化量」＋「放流量」で計算されるが、ダムの水位データの変化をみると頻繁に上下動を繰り返している。これは風の影響を受けるとともに、その貯水池特有の「セイシュ」と呼ばれる長周期の水面変動があることが分かっている。

現地計測と水理解析により計測水位データからノイズを除去する手法として貯水位平準化フィルタ法を提案し検証した結果は非常に良好であり、一方では計測データから直接静水位を推定する手

法として、同期加減算処理という推定法を開発するなど、研究が進んでいることが紹介されました。

富山県の神通川・庄川にある直列多段の発電ダム群での流量精査を通じて、洪水時に生じるダム放流量の精度劣化が明らかになり、実際の放流量が大きくなる過大放流に繋がるので早急な解決が求められることや、庄川の合口ダムにおける洪水時の流況解析を行った結果では、越流水深が堰高を超過すると貯水池内の流速が著しく増大することが確認されたことから、解決策を構築することが重要だと指摘されました。

(2) 水門について

富山県の小矢部川にある小矢部大堰の水門で、水門放流量と下流の河川流量が一致しない状況が続いていた。既存の水門理論は水路幅と同じ幅の水門（単門）を対象に構築されたものであるが、実際の水門は複数の水門を持つことが多いことから、単門の理論では適応できない流れの変化があることが分かってきた。

現在の水門理論では自由流出ともぐり流出が別々に定式化されているが、このような流出形態の判断が重要であるのに、判断手法が存在していないのが現状であることから、既存理論をベースに水路幅と噴流幅をモデル的に組み込んだ計算法を構築し、流出形態を判定する手法を提案されているとのことでした。

■ 交流会

総会及び特別講演会后、金沢勤労者プラザ1階のレストランで、講師を囲んで交流会を行いました。大石副会長の挨拶・乾杯の後、講師との懇談の他、会員同士の交流も活発に行われました。

今度副会長の音頭で中締め後、散会となりました。

【交流会の一コマ】



(文責 福井 為沢 剛)